

〔書評と紹介〕

『青森県史 資料編 近世2 津軽1 前期津軽領』

岡崎 寛徳

待望の刊行物を手にした。『青森県史 資料編 近世2 津軽1 前期津軽領』である（以下、『近世2』と略記）。約五十巻を予定している『青森県史』は、平成十三年（二〇〇一）より刊行が開始されたが、これはかつての『青森縣史』以来七十五年振りとなる。

この内、近世編の『資料編』は九巻の構成となっており、平成十五年七月現在、すでに三巻を入手することができる。『近世1 近世北奥の成立と北方世界』に続き、『近世2』そして『近世4 南部1 盛岡藩領』の三巻である。また、「後期津軽領」「八戸藩領」「学芸」「半島と海」「北奥の生産と生活」「幕末維新」の六巻が続刊として予定されている（『近世1』「はじめに」）。すなわち、青森県全域やそれを越えた広域を一つのテーマからとらえたものと、『近世2』を含め領域（藩領域）別にとらえたものとに大別することができる。分量も、内容も、『青森縣史』とは比較にならないほどの充実度である。

さて、『近世2』は以下の構成となっている（項目省略）。

第一章 藩政確立期の情勢

解説

第一節 幕藩関係の展開

第二節 確立期領内の諸相

第三節 津軽黒石領の成立

第四節 家臣団統制

第二章 津軽平野の開発と村落

解説

第一節 近世前期の村落と開発の諸相

第二節 貞享の統一検地と元禄期の村落

第三章 弘前城下と青森

解説

第一節 城下町弘前の展開

第二節 湊町青森の展開

第四章 津軽九浦の展開と交通・運輸の発達

解説

第一節 九浦制と流通統制

第二節 海運

第三節 陸上交通

各章ごとに「藩政」「村落」「町」「流通・交通」と、テーマが分けられていく。その他、巻頭に口絵、巻末に「掲載史料・所蔵先・略記一覧」を付し、また、貞享二年（一六八五）の「弘前并近郷之御絵図」を別冊として収録している。

次に、本書の内容を各章ごとに簡単に紹介する。ただし、分量の多い史料集であるため、筆者が個人的に関心のある第一章を中心に、特筆すべき点に絞って記すこととする。

第一章では、津軽土佐守信義・越中守信政時代の藩政史料を中心に掲載している。その特徴は主に三つある。

まず一つには、既刊『近世1』のスタイルを受けて、第一節が正保元年（一六四四）からの編年配列を行っている点である。『近世1』第一部は天正十五年（一五八七）～寛永二十年（一六四三）までの編年史料集で、『近世1』と『近世2』を通観することにより、近世初頭から中期にかけての津軽氏・弘前藩の動向を、歴史的流れの中で知ることができる。

二つ目は、第二節で弘前市立図書館所蔵の「弘前藩庁日記（御国日記）」を、寛文元年（一六六一）から同七年まで一括掲載していることである（四六～二七頁）。他の史料が二段組で掲載されているのに対し、この部分は三段組となっている。それでも、全体の二割以上の分量を占めており、重点の置かれた史料であることがわかる。

勿論、多くの頁数を割きながらも掲載したのには、それなりの意図がある。この日記は弘前藩政ばかりではなく北奥地域の当時の状況を知る上で基本的かつ有効な史料であり、そのため各自治体史でも掲載されてきたが、従来は部分的・限定的な掲載であった。それに対して、「総体的に把握」し、「トータルな理解にいたる」ために、ここでは一括の掲載スタイルがとられた（第一章解説参照）。我々利用者・研究者にとつては非常に有益である。使用頻度が高くなるであろう。

三つ目は、第四節の弘前藩重臣杉山家伝来知行宛行状で、これも一括掲載されている（二四九～二五五頁）。この文書は、「県史近世部会の調査の過程で発見した新出史料であり、初めて公開する文書」（第一章解

説）で、口絵にも四点が載せられている。藩主と重臣の関係を研究する上で重要な史料である。こうした新出史料の発見は、編纂事業の大きな成果である。今後も『青森県史』刊行に伴い、史料が新たに表出してくることを期待したい。

第二章は、耕地開発が主題である。第一節では「開発と知行宛行」「開発の進展」「前期の村落と農政」の三項を立て、土豪的存在である「小知行（こちぎよう）」の動きや、新耕地の開発者が藩士として取り立てられた状況などを知り得る史料が掲げられている。第二節は「天和の書上と村絵図」「貞享の統一検地」「元禄期の村落と農政」という三項で、天和・貞享・元禄期における開発の様相に関する史料を取り上げている。弘前藩および領民にとって重要課題であった、元禄八年（一六九五）の飢饉関係史料も掲載している。

第三章は、城下町弘前と湊町青森という二つの町を取り上げ、前者は「城下の支配と構造」「町方の負担」「商いと諸稼ぎ」「都市民の生活」、後者は「町の支配と構造」「町方の負担」「商いと諸稼ぎ」「青森湊と廻船問屋」と、それぞれ四項を立てて関係史料を構成している。また、前章の元禄八年飢饉は、本章第一節にも密接な関連性を持つ。飢饉による財政難から、藩は大量の家臣団を召し放ち、藩士の屋敷替や郭外移転を行っている。そうした実情を掲載史料から見ることができ、一方、次の第四章とも関連する第二節では、第一節まで頻繁に掲載されていた藩政史料ばかりではなく、青森県立図書館所蔵の滝屋伊東家文書なども多用されている。この文書群があることによって、藩政史料のみで描かれがちな本書が幅の広いものとなっているのである。

第四章では、「既に活字化され、比較的入手しやすい史料集などに掲載されているものについては、行論上不可欠なものを除いて、掲載しなかった」ということである。しかしその分量から、それでも多くの関係史料がまだ活字化されていなかったことがわかる。六湊（青森・鰺ヶ沢・深浦・十三・蟹田・今別）と三関所（碓ヶ関・大間越・野内）からなる津軽九浦について、第一節の「九浦制の成立と各浦の機能」「流通機構の変動と九浦制の動揺」で扱い、第二・三節では、それぞれ「日本海海運と西浜諸湊」「太平洋海運と青森湊」および「交通・運輸政策の展開」「領内をめぐる主要道」の項目から、海運・陸運に関する史料を掲載している。また、全節にわたり、幕末に至るまでの史料も多く取り上げていることも、本章の特徴である。

ここで史料構成などを細かく記すことができないが、いずれにしても、『近世2』は質・量ともにすぐれた史料集である。しかし、自治体史編纂に関わった経験者として、また今後扱う利用者として、少々残念に感じた点を述べることにしたい。

まず思ったことは、使いづらさである。それは本書を通じて言えることであるが、史料が探しづらい点に集約される。

目次は巻頭に付されているが、細目次ではないために、目的の史料へ辿り着くのに時間がかかる。何年何月の史料が見たい、何家の文書を調べたい、と思っても、その都度解説の一読や数頁あるいは数十頁捲るなど、一手間二手間が必要となる。例えば、本書最大のメリットでもある、一括掲載の「弘前藩庁日記（御国日記）」は何頁から始まっているのか、目次から探すことができない。これは巻末の「掲載史料・所蔵

先・略記一覧」にも相当することで、この表から本文中の史料番号および頁数を割り出せないのである。

資料編の良いところは、最初から最後まで順番に読まなくとも、興味のある史料から読めることで、それは今後の通史編にも当てはまる。ダイレクトに辿り着くためには細目次が不可欠であろう。本書は内容が非常にすぐれたものであるだけに、その点が残念に思えて仕方がない。

史料の本文については、全く注記がない点が気になった。事前に知識があれば、その人物が幕臣であるか大名であるか、津軽家当主か家老か、またどのような役職に就いている藩士であるか、といったことはわかるが、注記がないために、初見の人物が出てくる度に別の書物で調べる必要が生じる。全てとは言わないまでも、せめて幕臣・諸大名と津軽家当主・家老・用人クラスについては、『近世2』一冊内で情報を得たいものである。編集作業は手間のかかるものではあるが、索引は別巻として刊行される予定で、それもしばらく先のことであるからこそ、必要ではないかと思う。

また、各章の冒頭に付されている解説についてであるが、史料の内容だけではなく、編集意図なども記されていて興味深い。ただ、掲載史料の一点一点についても、ごく簡潔な解説文があっても良かったのではないだろうか。人名や地名の注記とともに、利用者は非常に史料が読み解きやすくなるであろう。

資料編という性質上、評するのは難しく、内容よりも些末な点を批評する形となってしまった。しかし、非常に興味深い史料が多く掲載されているので、求められることを是非にもお勧めしたい。

限られた紙幅を考慮しながら、多数の掲載候補史料から何を取捨選択するか、これは編集上の最大の問題である。編者の姿勢が問われるところでもある。その意味で、「弘前藩庁日記（御国日記）」一括掲載、新出史料の杉山家伝来知行宛行状の掲載など、刊行の意義は大きい。一方で、「近衛家雜事日記」など、捨象せざるを得なかった史料も多数あることだろう。この一冊で近世前期の津軽領を語り尽くすことができるわけではない。そうした点は、調査・研究成果の集大成となる『通史編』でカバーされることになる。『後期津軽領』を主題とする『近世3』とともに、その刊行を強く期待している。利用しやすい『索引編』の刊行も切に願う。

（A4判、七四八頁、青森県、二〇〇二年三月刊、七五六〇円）

（おかざき・ひろのり 日本学術振興会特別研究員）